鹿児島県立博物館研究報告　第40号：89－94，2021

博物館における中学生・高校生のボランティア活動

久保　紘史郎

Volunteer Activity of the Junior High School and High School Student in the Museum

Koshiro KUBO

はじめに

日本におけるボランティアへの興味関心は高く，80％以上がボランティア活動に関心があると答えている（三井情報開発株式会社総合研究所，2004）。そのような状況にあって，ボランティアを受け入れている博物館は1997年時点では13.4％であったが，年を追うごとに増加し，2013年には37.4％となった（公益財団法人日本博物館協会，2014）。

当博物館では2007年に「鹿児島県立博物館 中・高校生ボランティアの会」が発足し，教育普及活動の補助や展示解説，博物館についての研修等の活動が行われている。毎年数十人のボランティアが登録し，組織としての活動は確立されているものの，活動に対する意欲の低下や，それに起因する参加率の低下等の問題が生じていた（2016，多久島）。そこで，2017年度から2020年度に掛けて，ボランティア，博物館，来館者にとって，より価値の高い活動になるよう，ボランティア活動内容の見直しを図ったので，それについて報告する。

1 「中・高校生ボランティアの会」の概要

(1) 目的

当館の中・高校生ボランティアの会は，中学生，高校生が博物館資料の整理や展示活動，教育普及活動等の博物館の活動に携わることにより郷土の豊かな自然への理解を深めるとともに，相互に触れ合いながら社会貢献を実践することで，社会の一員としての自覚を深めることを目的としている。

(2) 活動期間・活動日

活動期間は1年間であるが，会員の希望により更新することができる。活動日は年間5回の定例活動と会員の都合の良い日時（随時活動）である。

(3) 定例活動

年間5回，5月，9月，10月，12月，3月に実施している。イベントの役割分担や業務打合せ，バックヤード見学など研修等も実施している。

(4) 会員への連絡

定例活動の年間予定は，年度当初に連絡しているが，各定例活動の2週間ほど前に，所属する学校を通して，全会員に連絡文書を送付している。

(5) 随時活動

定例活動とは別に都合がつく日に，各自の興味関心がある分野のボランティア活動を行えるようにしている。大部分の会員は定例活動だけの参加であるが，専門的活動に興味関心が高い会員は，標本の整理やデータ登録，プラネタリウムの物語制作などの取り組みを行っている。

2 活動の問題点

当館における過去の中学生，高校生ボランティア活動の問題点として，年度内での参加率の減少や，登録はするものの十分活動を経験できないボランティア数が多いことがあった。これは，中学生，高校生ともに3年生の登録が多く，各年7月以降は進路実現のための活動を優先することが多くなり，ボランティア活動に参加できなくなるためである。また，2013年度には79名が登録するなど，職員数に対してボランティア数が過剰な状況が生じた。そのため，多くの会員が，同時に行うことのできる清掃活動や工作実験の材料作りなど，裏方的業務が定例会活動の大半を占めるようになった。裏方的業務も博物館運営に重要ではあるが，会員の意識とのミスマッチにより，参加率の低下につながった（多久島，2016）。

鹿児島県立博物館：〒892-0853　鹿児島市城山町1-1

さらに，会員の都合のよい日に行う随時活動については，インターンシップのような位置づけで，会員にとっては，貴重な体験の場であった。しかし，各会員が都合のよい日に赴いて行う活動は，学校の夏休み期間中など，博物館のイベントが多い時期とも重なり，充実した活動を行うことが難しかった。

3　活動の実際

(1)　2017年度の取組

ボランティアが主役のイベントを実施

ボランティア活動の一環として，「楽しい実験」や「展示解説」等の実践の場を設定することによって，活動に対する目的意識を明確にさせるとともに，随時活動などの日頃の活動に対する意欲を高めさせることを目的として，『「博物館が中高生に乗っ取られた！？」～中高生が博物館を運営する日～』を実施した。8月の定例会で，役割分担を行い，展示解説や楽しい実験，受付などの博物館業務を任せるとともに，化学研究部という部活動単位で参加している会員には，オリジナルの実験を準備して活動してもらった。

芳香剤を作る実験

プラネタリウムでの解説

図1　「博物館が乗っ取られた」での活動の様子

この取組は，画期的なものであったが，小規模な広報しか行わず，ボランティアの会のための活動になってしまったことや，小学校の土曜授業日とも重なったため，利用者は延べ299名と少なく，結果として会員は手持無沙汰な時間が多いという反省点も残した。

表1　2017年度の定例活動

実施日	内容	参加率
5月27日（土）	第1回定例会 活動内容説明，館内見学	74%
8月5日（土）	第2回定例会 「博物館が乗っ取られた」準備	50%
10月14日（土）	第3回定例会 「博物館が乗っ取られた」運営 （利用者：299名）	83%
12月9日（土）	第4回定例会 バックヤード見学などの研修	76%
3月3日（土）	第5回定例会 教育普及活動準備	67%

(2)　2018年度の取組

①　活動条件等の見直し

定例活動参加率の向上を目的にして，ボランティアの登録に当たって「入会の目的を達成するために，定例会を含め５日以上の活動を行う。」の条件を加えた。また，入会についての目的意識を明確にするため，入会理由の記述欄を設けた。

これにより登録者数は22名となり，会の発足以来，最少となった。一方で，年度後半の定例活動でも90%前後の参加率となったことから，少人数ながら，より目的意識の高い組織となったとも言える。

②　博物館秋まつりの実施

2017年度のイベント「博物館が中高生に乗っ取られた！？」の反省を生かし，確実な集客が望める10月の3連休中日に「第1回　博物館秋まつり」と名称を変更し，イベントを計画した。内容についても，親子での来館者が楽しめる「空気砲」や「スライム作り」などを追加するなど，来館者のニーズに合わせて見直した。また，イベントはボランティアを主役とし，8月の定例会の際に，実験の進め方やヘビの扱い方などについて，十分な講習を行った上で実施した。秋まつりでは，実験の進行や説明はもちろん，ヘビに触れるコーナーなど，ほとんどの接客業務をボランティアに任せ，職員はサポートを行った。

結果として延べ3,230人の利用者があり，来館者，ボランティアの会員ともに充実したイベントとなった。

スライム作り

紙トンボ作り

星砂の解説

ヘビを触るコーナー

図2　「第1回博物館秋まつり」での活動

表2　2018年度の定例活動

実施日	内容	参加率
5月19日（土）	第1回定例会 活動内容説明	96%
8月4日（土）	第2回定例会 秋まつりの準備	70%
10月7日（日）	第3回定例会 秋まつりの運営 （利用者：3,230人）	85%
12月15日（土）	第4回定例会 バックヤード見学などの研修	88%
3月2日（土）	第5回定例会 春まつりの準備	94%

③　展示解説の廃止

2015年度からの展示解説の取組を2018年度に廃止した。展示解説の取組を行ったことで，ボランティア活動にやりがいが生まれ，出席率が向上したことは大きな成果である（表3）。しかし，年5回の定例会活動だけでは，十分な習得が難しく，会員に過度の負担を掛けると判断し，廃止することにした。

表3　定例活動参加率と会員数

年度	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	会員数
2013年度	83%	57%	49%	49%	51%	79名
2014年度	64%	61%	52%	39%	52%	51名
2015年度	81%	65%	35%	35%	35%	57名
2016年度	95%	61%	61%	71%	56%	47名
2017年度	74%	50%	83%	76%	67%	48名
2018年度	96%	70%	85%	88%	94%	22名
2019年度	95%	39%	88%	53%	中止	43名
2020年度	中止	97%	95%	中止	-	46名

※2　高校3年生については年度途中から，参加が難しくなる状況があるため参加率から除いてある。会員数は高校3年生も含む。

(3)　2019年度の取組

①　春・秋まつりを活動の中心とする

年5回実施の定例活動の中心を「まつり」の運営に設定し，年1回の研修活動を実施することにした。

例年5月に実施している「博物館まつり（以後「春まつり」）」では，一日限定の高校生ボランティアを募り，イベントを運営していた。そのため，当日の朝に業務の打合せを行い，100名を超えることもあるボランティアに業務を割り振ることが，職員の大きな負担になっていた。2018年度の秋まつりがボランティアの会を中心にして，滞りなく運営できたため，春まつりも同様の運営を行うことにした。

結果として，2018年度にボランティア155名の協力で実施した春まつりを，2019年度は43名のボランティアの会で運営することができた。中高校生ともに1年生は，春まつりが初めてのボランティア活動であったが，2，3年生と共に活動することで，ノウハウについて指導を受け，スムーズに活動することができた。また，来館者からの「ありがとう」や「楽しかった」などの感想を受けて，大きな達成感を得ていたようである。

高校３年生については，進路実現に向けて学業優先になるため，春まつりで，ボランティアの会を卒業する形を取り，以後の定例活動については，任意で参加することとした。

10月には「第2回秋まつり」を実施した。ほとんどの会員が，これまで「まつり」を経験していることから，約3500人の利用者があったが，滞りなく運営することができた。職員も過度な準備やフォローの必要がなく，効率のよいイベント運営ができた。

表4　2019年度の定例活動

実施日	内容	参加率
5月19日（日）	春まつり 運営補助（利用者6,218人）	95%
8月3日（土）	第1回定例会 秋まつりの準備	39%
10月13日（日）	秋まつり 運営（利用者3,856人）	85%
12月14日（土）	第2回定例会 バックヤード見学などの研修	53%
3月7日（土）	第3回定例会 春まつりの準備	中止 ※1

※1　第3回定例会は新型コロナウイルス感染症拡大予防のため中止した。

液体窒素の超低温実験　イモリを触るコーナー

星砂の解説　空気砲の実験

図3　「第2回博物館秋まつり」

② 参加率の低下

5月と10月の「まつり」参加率は非常に高かった一方で，8月と12月の定例会の参加率が低迷した。これは，学校行事と日程が重なったことが大きな要因である。様々な学校の会員がいるため，全学校の行事を避けて定例会を設定することは難しいが，可能な限り影響が少なくなるよう，全学校の行事予定等を確認する必要がある。また，3月の定例会については，新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため，中止となった。

(4)　2020年度

① コロナ禍での活動

新型コロナウイルス感染症の感染拡大により，ボランティア活動も大きな影響を受けた。予定していた，5月の春まつりは中止となり，8月までは定例活動を行うことができず，ボランティア活動の目標や機会が失われてしまった。そこで，「楽しい実験」や「受付」等の活動体験の場を設定することで，活動に対する目的意識や意欲を高め，達成感を感じる機会にする小規模イベントを実施することにした。

9月19日に40名の会員を，20名ずつ時間を分けて2グループで集まってもらい，10月11日（日）の小規模イベントの打合せを行った。10月の定例活動は，当初予定では「秋まつり」であった。しかし，大きく広報を行うと，人が集まりすぎ，「密」が発生する可能性がある。そのため，直前にSNSで広報するに留め，内容としては規模を縮小した「秋まつり」を行うことにした。また，各会員の活動時間を2-3時間に短縮して，「密」になることを防いだ。のべ568人の利用者があり，来館者数は多いものではなかったが，活動の場を設定できたことに意義があった。12月にも「歳末感謝祭」として，同様のイベントを計画したが，新型コロナウイルスの感染拡大状況を踏まえて，ボランティア活動は中止することとなった。

表5　2020年度の定例活動

実施日	内容	参加率
5月17日（日）	春まつり 運営補助	中止 ※3
9月19日（土）	第1回定例会 次回活動の準備	97%
10月11日（日）	第2回定例会 小規模イベント （利用者568人）	95%
12月14日（土）	歳末感謝祭	中止 ※4
3月6日（土）	第3回定例会 春まつりの準備	−

※3　春まつりは新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止。

※4　歳末感謝祭は職員のみで実施し，ボランティア活動は中止。

4　まとめ

直近3年間の参加率は学校行事と日程が重なった際は，50%を割り込むことはあったが，それ以外では70%以上であり，イベントを実施した際は85～95%と非常に高い参加率となった。このことから，会員は定例会活動に，意欲と責任感を持って参加し

ていることがうかがえる。

中学生，高校生のボランティア活動として，どのような内容が良いかは，各博物館の実情によって変わってくるだろう。現在の「まつり」の運営を中心とした定例活動は，ボランティア，博物館，来館者の三者にとって，価値が高く，当館においては，理想的な形態となっている。今後も，環境や状況の変化に合わせ，内容を柔軟に見直しながら，ボランティア，博物館，来館者にとって，より充実した活動を目指したい。

引用・参考文献

公益財団法人日本博物館協会(2014)平成26年度日本の博物館総合調査研究報告書，p199-203.

三井情報開発株式会社総合研究所(2004)ボランティア活動を推進する社会的気運醸成に関する調査研究報告書(平成 15 年度 文部科学省委託調査奉仕活動・体験活動の推進方策等に関する調査研究)，150pp.

多久島徹(2016)博物館における中学生と高校生のボランティア活動．鹿児島県立博物館研究報告(35)：111-114.